

とくいく「禅語」一

■ 挨拶（あいさつ）

朝、家族と顔を合わせれば「おはよう」と挨拶をします。また近所の人や職場に行っても「おはよう」「こんにちは」といった挨拶をします。この挨拶という言葉は、もとは仏教用語なのです。

挨拶の「挨」とは「推しはかる」「近づく」「触れる」といった意味で、「拶」は「せまる」「切り込む」という意味です。これだけを聞くと、なんだか少し物騒な言葉のようにも感じられるかもしれませんが、それは禅宗での、師が弟子に声を掛けるなどし、その返答でもって修行の度合いをはかるといったことが行われてきたことから、そのような問答を「挨拶」と呼びました。

例えば、弟子が師から「中庭はきれいに掃除できたか？」というような感じで何気ない一言がかけられる。言葉それ自体は中庭の掃除について問うていますが、その真意がどこにあるのかといった、弟子にはそれを瞬時に察することが求められました。とっさに、「中庭イコール自分の心」「きれいに掃除イコール心の曇り迷いは拭き取れたか」と解釈し、師は自分の修行の具合を訊ねたのだと察知すること大事なのです。

そこで、弟子はこの問いに何らかの返答を試みる。「今は掃除したばかりなので綺麗ですが、明日になれば、また塵や汚れがでて掃除が必要になるでしょう」といった感じですか。そうやって「掃除に終わりはない、修行にも終わりはない」のだと、言外（言葉に出さないで）に伝えるのです。このように禅の挨拶に限らず、普段の挨拶を通して、相手の心の状態や体調を知ることや感じることに同じで、いつも元気に挨拶をする人が、今日はちょっと声が小さかったりすると、「あれ、何か心配事でもあるのかな、体の調子でも悪いのかな」と、頭によぎるものです。そうした能力（察知する力）のようなものを、私たち人間は具えています。

おそらくは禅の挨拶（問答）もそういったものなのではないかと思います。構えて挨拶をするのではなく、自然と声を交わすなかに互いの意図が空気を通じて届くのだということです。

初対面の人から明るく「こんにちは」と声をかけられれば、その人に対して好印象を抱き安心感を抱きます。逆に、こちらが挨拶をしても無視されてしまったら、自ずとその人の印象は悪くなります。

「挨拶（言葉）を交わすことで、言葉以外の「何か」が交わされているのは疑いのない事実です。」そして、その「何か」のほうにむしろ主体となったのが、「禅」でいうところの「挨拶」なのだと思います。一言の言葉に気持ちを込めて、そこから「何かを伝え、汲み取る」ことは、今も昔も変わることなく大事なことのようになっています。